

CASA新聞

発行 株式会社カーザミカワ
 岡崎本社 ☎0564-24-2511
 岡崎市吹矢町8番地
 豊田営業所 ☎0565-28-3891
 豊田市豊栄町6丁目1番地

製品は内外材ともに品薄続く 名古屋地区

名古屋地区内では、国産材や外材製品の品薄が続いており、値上がりも進んでいる。国産材素材は、製品高や今後の季節要因による素材調達の変動を織り込んで桧並材が値上がり。国産針葉樹構造用合板は素材コストの上昇が課題で、流通在庫が少ない。

国産材素材は桧並材の柱取りなどが値上がりしている。地区内有力素材市場の特市は各所引き合いが強く、並材は強含みの展開。これを受けて、今後の集荷の前倒しを検討する市場もある。

国産材製品は外材製品の代替需要で全面高。地区内製材工場は既納客最重視で供給しているが、事実上製品価格は時価で

欧州材商況 先物コストさらに上昇

直近の契約交渉で輸入構造用集成材及びびラミナをはじめとした欧州材各品目の先物コスト大幅上昇により、国内の各流通業者や集成材メーカー、製材工場はコスト転嫁のため値上げを急いでいる。

国内製材大手が米松製材と集成管柱を値上げしたことで、欧州材製品の値上げ幅はこれまで以上に上がりそう。ただ、欧州材製品は流通が十分ではなく、内外産ともブレカット工場への納期に時間が掛かっている。今月以降のラミナの入荷動向次第で、国内集成材メ

見積もりの期限を短縮化している。欧州材製品の入荷減と値上がりは当面続く見通しで、ブレカット工場の稼働にも影響が出そう。Wウッド間柱は杉、桧、LVLの代替品が間に合わない。Wウッド集成管柱は、現地挽きのほかラミナ不足で国内メーカーの増産も期待できない状況だ。Rウッド集成平角は、月ごとに値上げが続く見通し。

ロシア材エゾ松製品は、供給不足と引き合い増で値上がり。北陸の製材工場は、赤松の代替品として拡販する方針だ。

米材輸入製品も入荷減と流通在庫払底で値上がり。中間流通では、同業者間の融通も困難だといひ、国産材に代替品を求める動きも

1カーの生産が今後さらさら低下する恐れも指摘されている。羽柄材はWウッドKD間柱の5、6月積み交渉が佳境に。産地からの値上げ要請は前回以上に強まっており、供給縮小にも拍車がかかっている。欧州から北米向けのディメンション価格が日本向け間柱より居所が高く、産地の供給軸足は依然として北米に置かれている。欧州域内の木材需要も堅調で、輸送コスト負担が大きい日本向けより陸送が可能な欧州内向

け生産を増やす動きもあるようだ。各交渉での供給減に加え、船積み遅れや經由地での停滞など輸送の乱れも入荷の不安要素になってきている。世界的にはコテンナ不足は解消に向かいつつあるが、欧州から日本への輸送はコテンナ確保が依然として難しい。

名古屋

欧州材製品は入荷減と値上がりが同時進行し、代替品では対応しきれないとの指摘も多い。資材在庫が払底しつつある

プレカット工場の大型連休以降の稼働にも影響しそう。Wウッド間柱は、杉、桧、LVLの代替品の量が間に合っていない。Wウッド集成管柱は、現地挽きのほかラミナ不足で国内メーカーの増産も期待できない。Rウッド集成平角を扱う問屋は、「5月に1万円以上値上げし、その後も値上げが続く」と話す。梁は、住宅供給を最優先にRウッドや米松KD、ハイブリッド、杉と樹種対応を広げるビルダーもある。

目立つ。針葉樹合板は引き合い増でメーカー在庫が減少し、納期が掛かるようになってきた。流通在庫が少ないこともあり、今後は値上がりも予想される。

3月新設住宅着工 21か月ぶり増加

国交省が発表した3月新設住宅着工は、7万1787戸（前年同月比1・5%増）で、21カ月ぶりに増加した。貸家が31カ月に増加し、マンションは6カ月ぶりに1万戸を超えた。一方、2020年度の年間着工戸数は81万2164戸（前年度比8・1%減）と、2年連続で減少。近年ではリーマンショック後の09年（77万5277戸）に次ぐ低水準になった。21年3月の総数増加は、回復の兆しがあるわけではない。前年同月比で持ち家が横ばい、貸家が約700戸増、マンションが約900戸増、戸建てが約300戸減、給排水設備は約300戸減、給排水設備の増加要因はマンションによるものが大きい。

米松製品ほか値上げ幅拡大

米材協議会名古屋支部は4月26日、名古屋木材館で例会を開き、需給や市況の動向などを協議した。木材不足は樹種を問わず全体に拡大し、流通業者からは「満足に買えていない」との嘆きが続いている。価格評価は丸太・製品とも引き続き全面高となっている。

米材丸太は、日本向けの供給および国内在庫の減少により、米松ではSS/Jソート級が前月比高の1割以上高騰を評価している。このほか米

米ヒバも居所を上げており、米材輸入製品は前例のない品不足が続く。先行きの供給も見通せない。厳しき情勢にある。問屋からは「在庫が0・5か月分を切る状態。顧客には入荷ごとの対応しかできない」と伝えていた。「顧客を1件ずつ精査し、ランク別に出荷量を決めていかざるを得ない」といった声も聞かれた。今後については、木材価格高騰を受けて、底上げになった。

20年度（同7・1%減）と2年連続で減り、1961年度（26万2335戸）に次ぐ約60年ぶりの低さとなった。コロナ禍により近年最低だった14年（27万8221戸）を下回った。貸家は30万3018戸（同9・4%減）で4年連続減少し、リーマンショック後の10年（29万1840戸）、11年（28万9762戸）に次ぐ低水準となった。分譲住宅は23万9141戸（同7・9%減）で2年連続減少し、14年（23万6042戸）に次ぐ低さだった。

表示説明	値下げ	横ばい	値上げ
市況状況	ラワン薄ベニヤ	・	・
	ファルカタ正寸12mm T2	・	・
	針葉樹12mm 3×6	・	・

輸入合板・木質ボード商況

供給、一向に改善せず

輸入南洋材合板は供給不安が解消されず、現地の騰勢も前例のない勢いで進んでいる。例年であれば原木出材が活発化し、現地合板メーカーは丸太を手当てしやすい時期に入っている。しかし、今年人手不足による伐採減と急激な洪水による物流の停滞で出材環境は改善していない。しかも、インド勢がマレーシアを中心に積極的に丸太を手当てしている影響で丸太価格が上昇。このため、原材料価格は落ち着くどころかさらなる値上がりを見込まざるを得ない。さらに、コロナ禍で各合板工場も人手不足が深刻化しているうえ、マレーシアでは新型コロナウイルス感染再拡大に伴い制限措置を強化する動きも出ている。制限措置が経済活動にも及んだ場合、現地合板工場の更なる生産効率の低下に繋がりがかねない。

国内市場では普通合板系の品薄感が強い。特に基材関係での影響は深刻で、建

材メーカーも関連する製品の値上げを打ち出し始めている。MDFなど木質ボードへの代替を検討する動きもあるが、こちらも価格は上昇基調。12、厚品も型枠需要の弱さから建築への影響はないが、流通在庫の逼迫感も強まり、「少しでも需要が出れば一気に品不足に陥る」（商社）との懸念も。

強基調鮮明に
中部市況は輸入合板は引き続き入荷量が減少しており、産地の丸太不足やコロナ禍の影響で頭在庫の消化で品薄や欠品が見られ、産地高を背景に川上の提示価格は強基調となっている。流通業者は在庫切れ回避のため品物の確保を優先し、高値を受け入れざるを得ない情勢だ。需給は活発ではないが需給バランスの乱れが顕著になっている。

Wウッド間柱500ユーロ口へ急騰 5、6月積み交渉

欧州産WウッドKD間柱の5、6月積み交渉がまとまり、産地価格は前回比100ユーロ近い上昇で500ユーロ前後（C&F、立方材）に急騰。産地からの提示数量が通常比60%程度と少なく、輸入元は高値提示でも数量確保を優先した。5、6月積みWウッドKD間柱は、500ユーロ（同）前後での成約が主流になった。日本向けに不定期で供給する企業からは、さらに一段高の提示があった。そのほか、タルキヤや胴縁といった羽柄材も間柱同様に値上げ幅が大きく、成約価格は500ユーロ（同）を超えている模様だ。間柱の前回3、4月

積みは390ユーロ台での契約だったが、一気に100ユーロ前後の上乗せとなった。輸入元は「コロナ禍の混乱で仕入れの経費が平常時以上に嵩んでいる。価格への転嫁が必要になる」と話している。数量も前回に引き続き絞り込まれている。主要企業でも通常比60%程度に留まり、交渉が行われなかった小企業もある。日本向け供給比率が高い産地企業では、欧州内や米国向け価格の居所が高いため、日本への販売量確保に苦戦している。直近では豪州の住宅市場も好調で、欧州勢にとって注目の市場の一つになっている。コンテナ不足も解消

されておらず、特に北欧やバルト海周辺で手配難が続く。コンテナ運河の座礁事故などで日本への入荷も通常より2カ月程度の遅れが常態化している。今回交渉分も遅延が予想され、入荷は8月頃からになりそうだ。また、産地では丸太の値上がりと流通タイ化が進んでいる。特に中欧でのWウッドが顕著で、製材工場への丸太の雨期も乱れが生じているようだ。気候要因や虫害の影響が続いていると見られる。Wウッドの減少に伴い、品目によっては代替としてRウッドを用いるケースもある模様だ。

プレカット商況

プレカット市場は混乱に陥った。特に3月下旬、国内集成材メーカーが欧州産プレカットに陥り製品供給が約束されていたプレカット工場も一斉に品物不足に陥り、目先の加工すら危うくなった。集成材工場は西日本に多く、同地プレカット工場は国内産比率が高めであることから、減産している工場も少なくない。こうしたタイピングで需要期に差し掛かり、大手・地場ビルダーのプレカット受注が増加し始めた。プレカットの加工遅延はすぐに住宅会社にも伝わり、建設の遅れや住宅販売上昇を契約見込み客に打診し始めた。4月の全国プレカツ

ト工場25社を対象とした稼働状況調査によると、企業別受注平均は94.2%（前年同月比4.1%増）と、2月を底に2カ月連続で増加した。明らかに2、3月よりビルダーからの受注が回復傾向にある。工場各社のコメントにも力強さがある。ただ、4月調査の受注急増は、「住宅会社による木材製品不足と高騰前の駆け込み発注かもしれない」（プレカット工場）との指摘もある。確かに、2、3月の同調査における住宅会社の立ち上がりはかなり鈍く、4月からはこれほど受注が増える雰囲気ではなかった。2、3月から住宅会社にも製品不足と急騰が

伝わり始め、販売店から問屋への仮需も急増している。一部のプレカット工場も「住宅会社は資材確保のため、5、7月分の図面を今までにない早さで出している」と話す。企業別の稼働平均は90.6%（同2.6%増）と、2月を底に3カ月ぶりに増加した。来月5月受注の手応えを測る見積もり平均は93.0%（同4.6%減）と、2月分を底に3カ月連続で増加。今年に入って初めて90%を超えたが、2020年は年間を通して90%台で推移した。非住宅案件も急速に浮上したが、木材をより多く使うため、住宅以上に仕事を請けられる状況ではない。

名古屋
地区内工場の大半が材料不足を危惧する。Wウッド間柱は杉や松に、Wウッド集成管柱も松などムク柱への移行が進むが、国産材も量が課題に。地方の工場は、代替材利用に伴う住宅の工法変更を提案しているが、非住宅物件は見積もり受付を停止している。別の工場では、製品価格上昇を織り込んだ見積もり価格を提示しており、「横架材の調達状況次第では今後、工場稼働停止もあり得る」と話す。賃加工が大半を占める工場も、主に外材製品を使用する住宅の加工は早晩でなくなりつつある。非住宅物件に力を入れている。材料価格は時価で提示せざるを得ないという。

国産の在庫量は底ばい 3月の合板供給

3月の内外産合板供給量は48万6100立方メートルで、前年同月比1.3%増（前月比15.1%増）となった。国産合板は生産量が3カ月ぶりに27万立方メートルを超えたが、針葉樹合板の期末在庫量（日合連推計値）は10万3100立方メートル（同71立方メートル増）と底ばい。輸入合板の入荷量も2カ月ぶりに20万立方メートルを超えた。国産合板のうち、針葉樹合板の生産・出荷量はほぼ均衡となったが、針葉樹構造用合板は出荷量が生産量を上回ったため、在庫量は9万1100立方メートル（同5300立方メートル減）となった。新年度から針葉樹フロア台

板を採用するメーカーが増えたため一部の合板メーカーが台板生産の比率を引き上げたこと、東日本の一部合板工場が3月下旬から火災により減産を余儀なくされていることが影響していると思われる。国産合板市場では他の木材製品のように不足感が発生しておらず、需給バランスは均衡している。ただ、針葉樹構造用合板で0.3カ月分という2週間にも満たない在庫量は状況次第では品不足に繋がりがかねないため、国内合板メーカーの警戒感も強い。輸入合板の入荷はマレーシアからは約2年ぶりに9万立方メートル超、インドネシア

も約1年ぶりの7万立方メートル超となった。ただ、例年3月は期末決算に伴う在庫調整の関係で、今年は品不足で早めに切ったため3月の数字が大きく変わったとの見方もある。また、1、3月の累計ではマレーシアが前年同期比3.6%増でほぼ横ばい、インドネシアが同19.5%減とほぼ2割減で入荷量が回復しているとは言い難く、現地工場も生産効率の減退が解消されていない。現地の受注も伸びておらず、日本の流通各社の注文量も低水準で推移しているため、今後もまとまった入荷が続くかは不透明。